

02 修士設計

開講年次：博士課程前期課程 2年生

古谷誠章賞

他者性の場としての雑居都市の設計

都心における自律的複合空間をもつ建築の提案

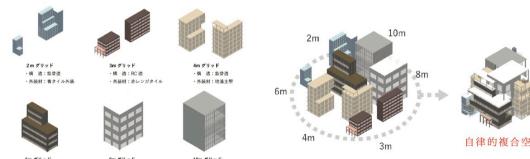
吉川文乃（楓橋研究室）



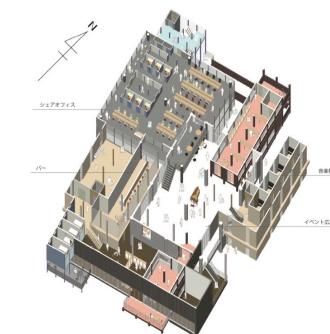
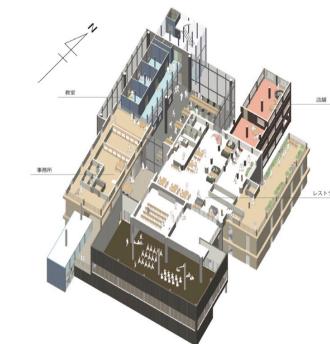
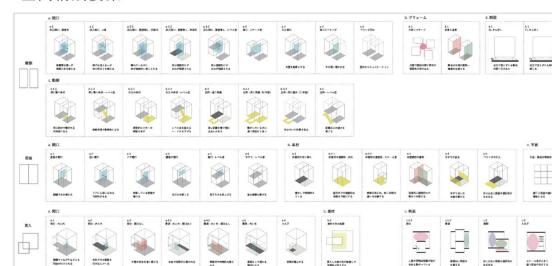
都市化に伴い建築が複合化してきた結果、自己完結的な商業施設、閉鎖的な集合住宅、雑居ビルの乱立など、場所との関連、他者との関係性を生み出さない空間が広がっている。一方でSNS等の発達により、私たちは他者と繋がるために必ずしも実空間で同じ場所に居る必要がなくなっている。そこで本研究では、作品分析を通して他者との関係性を生み出す建築の空間要素として形態的関係、視覚的関係、機能的関係の3つを示した。それぞれ独自の建築的特徴をもつ雑居ビルを複合化させて自律的複合空間をつくるという設計手法を用いて、これら3つの関係が共存し、他者と出会う可能性を秘めた空間を提案する。



設計手法：雑居ビルを複合化する



空間構成要素



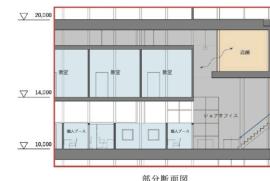
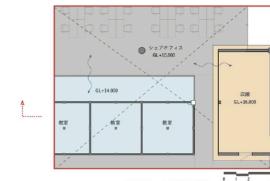
屋外のような高い吹き抜け空間



中庭に囲まれたバルコニー



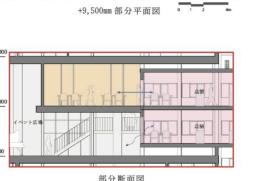
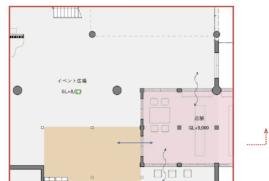
求心的なイベント広場



部分断面図



部分断面図



部分断面図

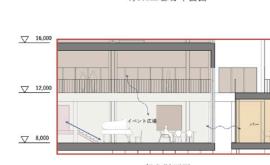
ボイドを介した対比的な空間



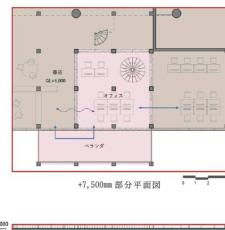
上下に貫入するレンガタイル壁



スケール差で切り取られた通路



部分断面図



部分断面図



部分断面図

伊東豊雄の建築思想と建築作品の変遷に関する研究及び設計提案

一 〈もうひとつの自然〉に着目してー

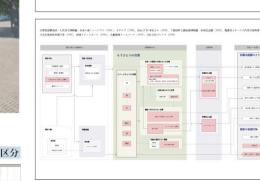
佐田桜（未包研究室）



本研究の対象は、伊東豊雄(1941-)の建築思想および建築作品である。伊東豊雄は、彼自らが定義づける〈回遊式庭園のような建築〉を追求してきた。伊東豊雄の建築思想において、外部の自然環境だけでなく、それとは異なる自然的要素を取り入れていると考えられ、彼の言説から〈もうひとつの自然〉と仮定し、その〈もうひとつの自然〉に着目することで建築思想と建築作品の分析を行うことにより、〈回遊式庭園のような建築〉の概念の本質とその変遷、さらにその現代的意義を明らかにすること目的とする。そして、伊東豊雄の建築思想の変遷を発展させて設計提案を行い、伊東豊雄の「建築思想の検証」とその「応用の可能性の模索」を行う。



—思想分析—



—作品分析—



(1) 思想分析と作品分析より、時間的な体験をする空間として「シェーケンス」のある空間と、目掛すべき条件として〈回遊式庭園のような建築〉の初期から貫いている手法は、重要な思想・空間的特徴として用いる。
 (2) 〈もうひとつの自然〉の空間構成手法の中で、考慮できる部分においては、その特徴を踏まえつつ、設計提案の趣旨である〈都市において自然を感じられる空間〉と「New normalなオフィス空間」に最適な手法に発展させて設計する。
 (3) 建築内部に〈もうひとつの自然〉を創造することで、〈回遊式庭園のような建築〉がくらわれているため、〈もうひとつの自然〉-〈回遊式庭園のような建築〉を日本として空間を構築する。

設計提案を踏まえた結論
 設計提案では、空間構成手法の〈もうひとつの自然〉において、初期から貫しているものは重要な思想的・空間的特徴として用い、変遷のあるものは設計専門員が過度な手法に発展させて空間構築した、現代の問題解決と、都市という自然とは離れた地域という条件の下、その空間において〈回遊式庭園のような建築〉の6要素を達成できた。この設計提案は、伊東豊雄の〈もうひとつの自然〉の空間構成手法を創造することで、〈回遊式庭園のような建築〉を創造することができるといつ一つの設計を示すことができたと考える。

[参考文献] 1) 伊東豊雄：風の変遷、青土社、1989 2) 伊東豊雄：透視する建築、青土社、2000 3) 伊東豊雄：伊東豊雄21世紀の建築をめざす、エクストラージ、2018 4) 伊東豊雄：伊東豊雄選作集、平凡社、2020



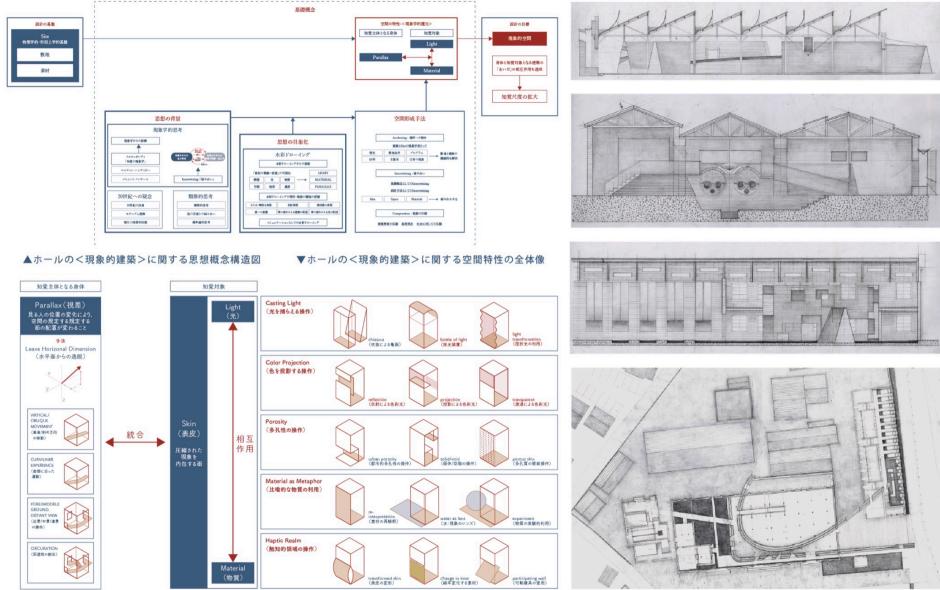
*コンセプトのだから3つ目の地図は国土地理院基盤地図を加工して作成



スティーブン・ホールの「現象的建築」の形成手法とその特性に関する研究及び設計提案

永本聰（未包研究室）

本研究は、現象学的な思考を背景とした建築活動を続けるスティーヴン・ホールの思想概念における「現象的建築」の概念構造を明らかにし、空間形成手法・空間特性的分析の特徴との対応を考察した。《Light》(Material)《Parallax》の特性を持った空間を構成する「面」による光の現象と身体の接点点にホールの空間の特性があると考え、分析から得た知見を発展させた近代産業遺産のリノベーション手法を用いた設計提案を行なった。



L-system を用いた形態生成による建築空間の設計 親自然型ニュータウン再生における超・群造形の提案

黒木孝司（櫻橋研究室）

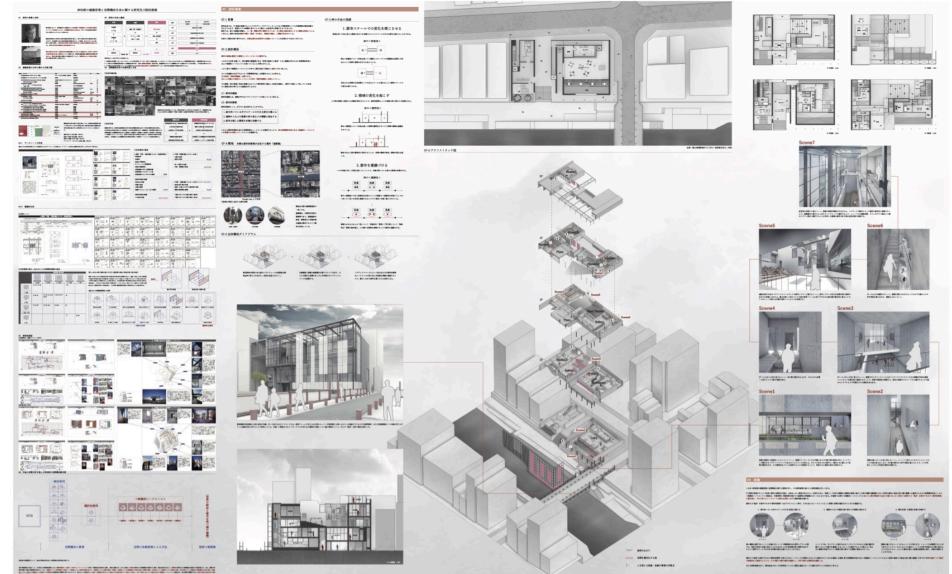
さまざまな自然物の構造を記述するアルゴリズムである L-system を用いて集合体を生成し、集合住宅の形態のスタディに利用する。L-system を効率的に活用できる集合体の分類として『超・群造形 / Hyper group form』を定義し、それらの特性が相乗的に作用し合う空間として、自然を引き込みながら自然に開き、多様な関係性を容認する親自然型の集合住宅を提案する。



岸和郎の建築思想と空間構成手法に関する研究及び設計提案

小池晃弘（未包研究室）

IT 技術が発達することで住宅と都市の断絶化が進み、本来都市に存在した人間性が失われている時代のなか、京都という内外の意識化が顕著な地域で過ごした建築家・岸和郎の空間構成手法である「映像的シーケンス」の認識対象であった「自然」を都市との「接点」を増やすための「都市的要素」に置き換え、それを岸のシーケンス構成要素である「官能性」>「透明性」>「連続性」に関連させながら応用した集合住宅を設計した。



歩行者空間の変容に伴う都市建築の設計 神戸三宮フランワードを対象としたウォーカブル建築の提案

高橋和志（櫻橋研究室）

近年、歩行者が見直されており、日本においても「ウォーカブル」の考え方の下、街路空間は豊かなものとなっている。しかしウォーカブルの概念が及んでいるのは街路のみであり、街区、及び建築内部においては歩行者行動が考慮されていない。そこで街路を構成する要素を研究し、その数値を測定することで、街路を建築内部にまで立体的に延長させ、建築と街路を連続させる。その結果街全体に回遊性をもたらすようなウォーカブル建築を提案する。

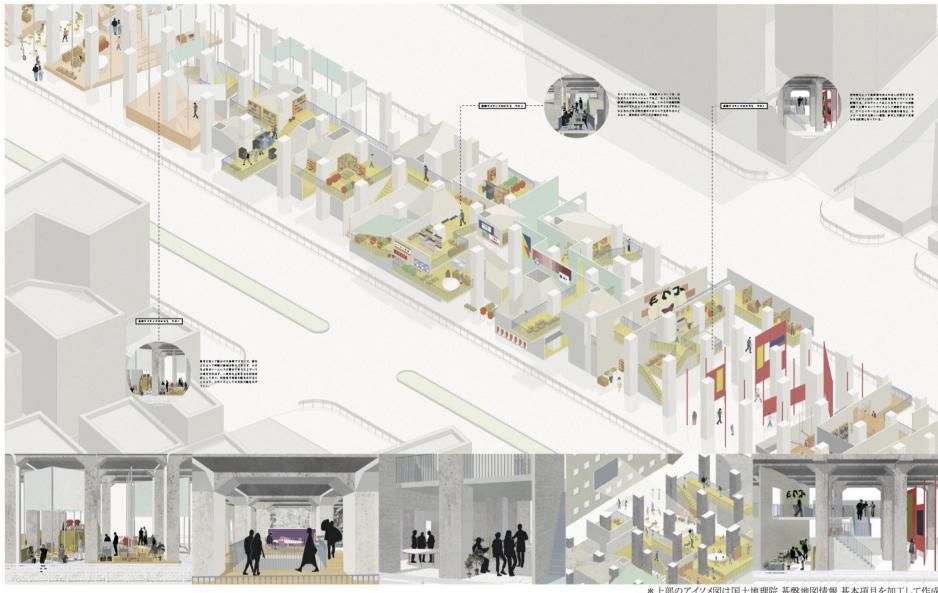




都市空間の複雑性の持続手法を用いた高架下コモンズの設計 元町高架下商店街の持続的再生計画

檀野航（橋櫛研究室）

都市のある空間が老朽化や機能としての衰退によって新しく生まれ変わる状況について、神戸にある元町高架下商店街を対象に、既存の方法に則って均質的な空間を創出するのではなく、商店街が長い歴史の中で蓄積してきた固有な空間性による「高架下コモンズ」を提案することで、都市の中での新しい役割や現代に存続し得る存在意義を発見し、都市における文脈の在り方における可能性を、本設計にて提唱する。

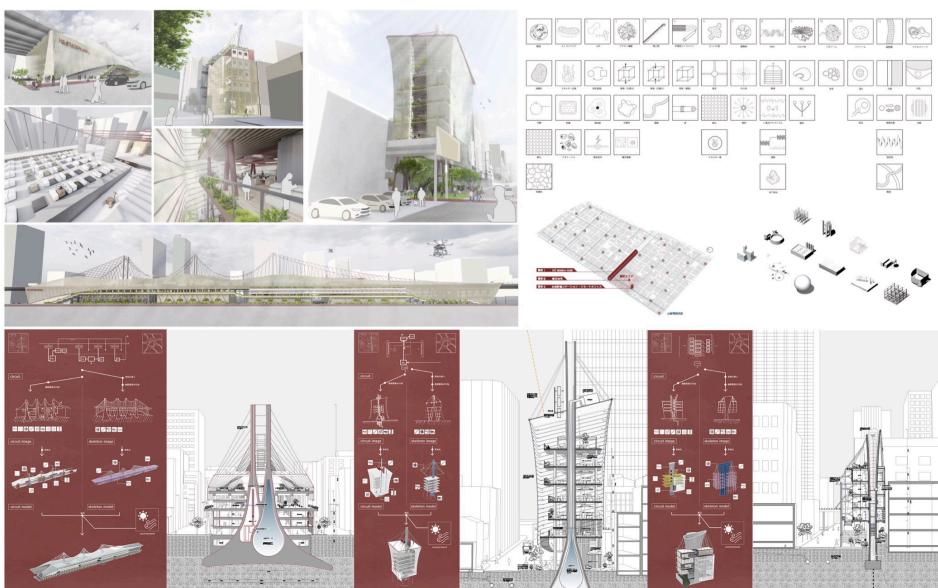


*上部のアイメ図は国土地理院 基盤地図情報 基本項目を加工して作成

水素社会における細胞的広がりをもつ都市空間の研究及び設計提案

中上和哉（光嶋研究室）

脱炭素社会実現に向けて、新規エネルギーインフラとして水素エネルギーに着目し、有機的変化に適応できる都市空間モデルを提案する。水素を利用した新規インフラは点的にエネルギーを生み出し分散的に消費する構造をなし、この仕組みは生物細胞のエネルギー伝達メカニズムと類似するところがあると考えた。水素エネルギーと生物細胞の双方の研究を統合させることで、建築から都市まで新陳代謝を可能とする細胞的広がりをもつ都市空間の設計を試みた。



*ベースのドローン画像は、江川慎太郎：ドローンで荷物配送、全国初の目視外飛行 福島の被災地、朝日新聞デジタル、2018.11.7、<https://www.asahi.com/articles/ASLQR015LQRUGTB001.html> (最終閲覧 2022.3.21) より引用

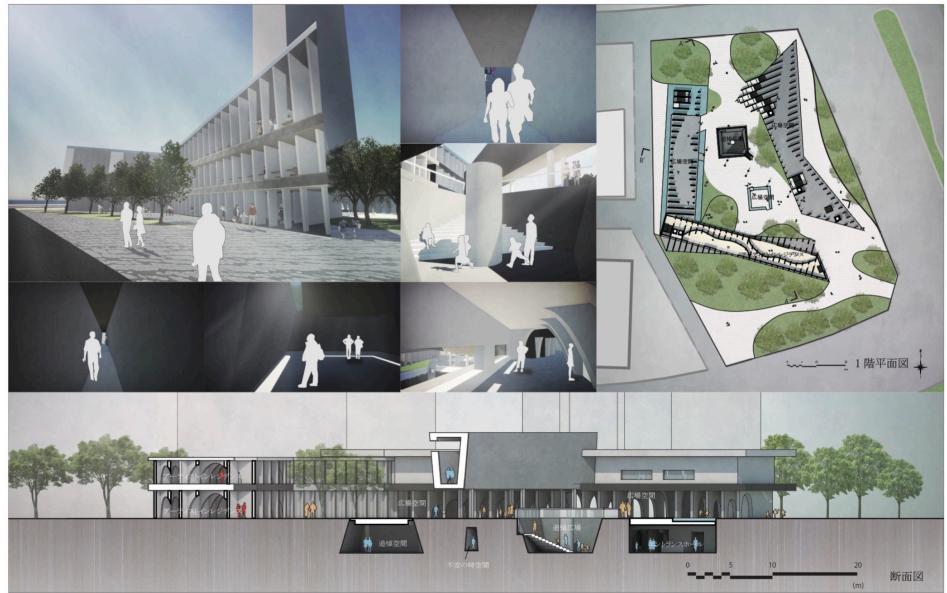
*中央右寄りの地図は国土地理院 基盤地図情報 基本項目を加工して作成



『Breaking Ground』と『Edge of Order』にみられるダニエル・リベスキンドの建築思想と空間構成手法の研究及び設計提案

藤原比呂（未包研究室）

リベスキンドは、付加されるべき建築の背景の物語を読み取り書き込んだテキストを読ませ、想起させている。そこで阪神淡路大震災を背景として設定し、建築に本質的に必要な要素を追い求めるリベスキンドの設計手法を活用し、阪神淡路大震災の歴史や記憶を想起させる空間を作り上げることにより、神戸を襲ったこの地震を風化させることなく、人々の記憶に残し、未来へと繋いでいくためのモニュメントを提案する。



中国の大学キャンパスにおける社会に開かれたコミュニティーセンターの研究及び設計提案

胡德寶（光嶋研究室）

学科融合の傾向で、産学連携はより密になり、加えて、情報技術の進化により教育を受ける場所が多様化し、大学キャンパスが本来閉じていた境界を開き、所有する知的資産を社会に開き、利用最大化することが必要であると考えらる。縁側のような中間領域は建築と環境を緩やかにつなぎ、インターラクションを促進する役割を果たすことが期待できる。中間領域の構成手法を抽出し、本設計に組み込むことで、学生たちが社会と触れ合いながら多様な知識を発見していく象徴としての大学コミュニティセンターを提案する。



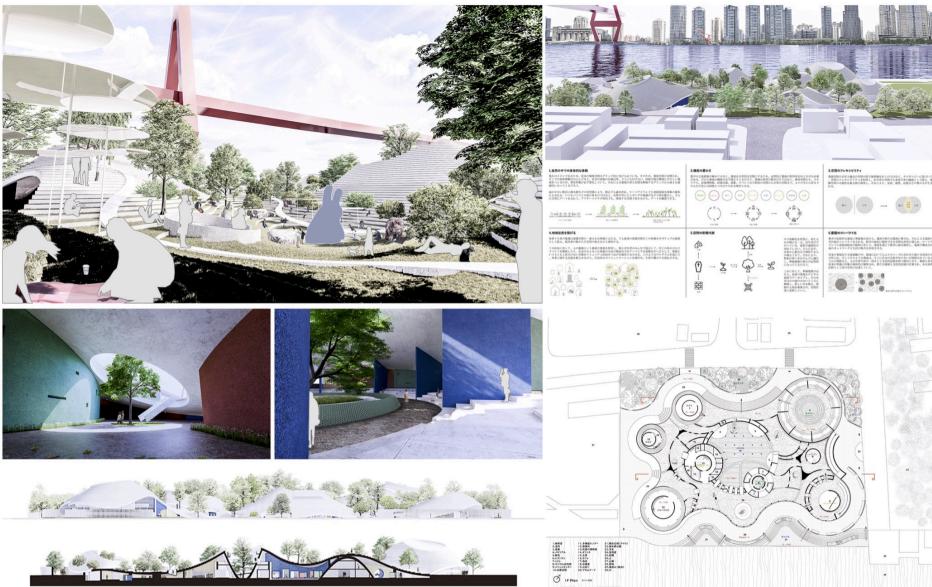
*Lumionを使用して作成



中国の少子高齢化社会における都市の新たな靈園空間の研究及び設計提案—儀式性と日常性に基づいて

曹陽（光嶋研究室）

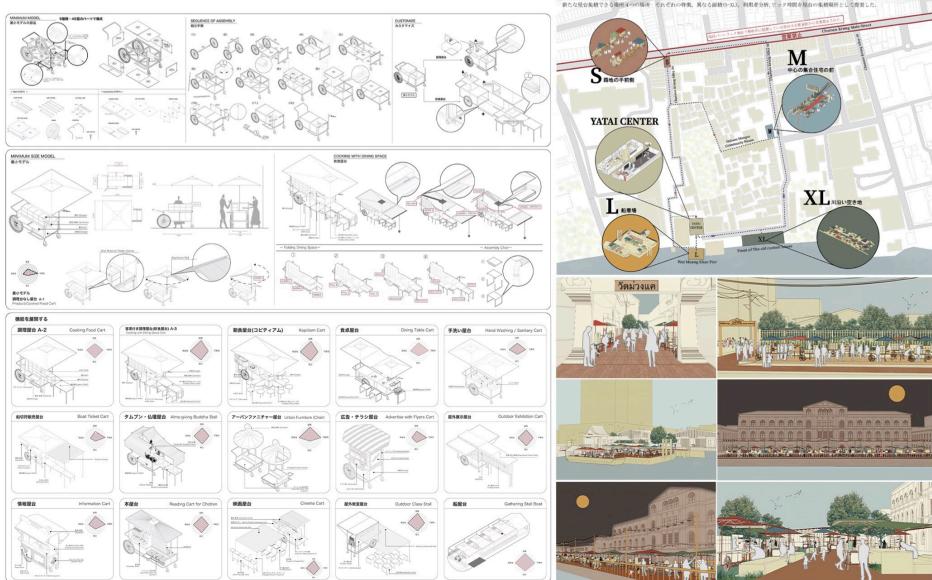
現在の中国では、靈園は大きな課題となり、靈園に関わる社会問題がたくさん存在している。都市の土地資源が極めて少ないため、中国の靈園の立地は郊外に位置することが多く、多くの靈園は緑化や塘に囲まれ、都市との繋がりが完全に断絶されている。本研究では、既存の靈園に関わる社会問題、中国人の死生観、新たな葬送形態などの研究に基づき、本来の靈園の価値を残しつつ、現代社会にマッチする未来の靈園の新たな可能性を模索することを目的とする。



タイにおける屋台のための建築に関する研究及び設計提案

TINNU Panchanok（光嶋研究室）

タイでは古くから屋台文化が非常に発達しているにもかかわらず、無秩序な屋台の配置から様々な問題が発生し、屋台の取り締まりが厳しくなり、中心街からは消えつぶされる。本設計の目的はタイの屋台文化と固有の風景を失わずに、建築的手段による屋台建築における都市空間の提案を通して、屋台文化の現代的な発展を目的とする。そのため新しい形態コンパクトで作り手によるカスタマイズが可能な屋台、対象敷地に対して順応した屋台用途の展開可能性と屋台の集積場所、屋台を生産や整備するインフラとしてのシステム、三つ総合的な提案をした。



■修士設計最終発表会の様子

[日時] 2021年12月20日(月) 14:30~18:30

[場所] 神戸大学百年記念館 六甲ホール

[担当教員]

主査・副査：末包伸吾（教授） 橋橋修（准教授） 光嶋裕介（特命准教授）

副 査：山崎寿一（教授） 中江研（教授）

補 佐：後藤沙羅（助手）

[ゲスト講評者] 古谷誠章（ナスカ一級建築士事務所 / 早稲田大学教授）

